

キラッ! 輝く人だち

地域のつながりが薄れてきているといわれる昨今。子どもや女性、高齢者を狙った犯罪を未然に防ぐためには「地域の目」が重要になっています。

平成19年10月、茨城県内で3番目に発足した古河地区防犯協会女性部。献身的なボランティア活動が認められ、昨年9月「全国防犯協会連合会表彰・社会安全貢献賞」を受賞しました。小学生向けの啓発活動を中心に活躍する皆さんに、活動内容や思いをうかがいました。

子どもたちの気づきの場をつくりたい

現在、総勢41人で活動している古河地区防犯協会女性部。毎年、市内の小学校で防犯教室を開いています。「よく披露するのは寸劇や紙芝居。知らない人についてイカない、など防犯の約束ごとをまとめた『イカのおすし』という標語を基にしています」と話す女性部の皆さん。平日の夜を中心に練習や打ち合わせを重ねています。

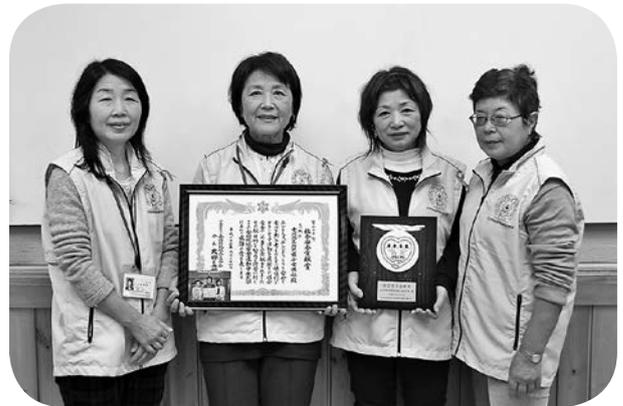
活動で常に意識しているのは、児童一人ひとりの『気づき』を後押しすること。「防犯の大切さを伝えるためには、子どもたちの印象に残ることが重要。分かりやすい解説を心がけています。『犯罪って怖い』『もし怪しい人に出会ったら』と考えるきっかけにしたいと思っています」と鈴木せつ子部長は話します。



▲防犯教室で1年生57人が「イカのおすし」を学びました(12月3日、古河第二小学校)

「安心して暮らせる地域を」

古河地区防犯協会女性部



▲左から新谷副部長、鈴木部長、中島副部長、大澤副部長

女性・母親の視点で

昨年からは、防犯ブザーの使い方や大声の出し方など、不審者対策の実技指導にも取り組んでいます。きっかけは「防犯ブザーの紐がランドセルに絡まっている子どもが意外に多い」など、母親として日ごろ感じている何気ないことです。

「今では自分から防犯教室の感想を話してくれる子どもが増えました」と活動の手伝いを感じている副部長の新谷さん。「子どもが防犯教室で学んだことを家庭で話すことで、親子が話し合うきっかけになれば良いですね」と、家庭での防犯意識のさらなる向上にも期待を寄せています。

防犯活動が地域のつながりをつくる

活動を始めて9年目。日々精力的に活動する女性部の皆さんを支えているのは『子どもは社会の宝』との思いです。

「犯人はあらかじめ現場を下見する傾向があり、常に隙を狙っています。子どもを家庭だけで守り抜くのは難しい。みんなが伸び伸びと安心して暮らすためには、地域での見守りが不可欠です」と口をそろえます。

「防犯教室を経験したその日から、子どもは地域のパイプ役。日ごろから家庭で話し合い、隣近所が気軽にあいさつを交わして、地域住民がみんなを守り合う。これほど心強いことはありません」と話す皆さんは、温かくて強い意気込みにあふれていました。